



といった要素を融合させたコンテンポラリーダンスだ。「舞台に水面をつくり、あの世とこの世を行き来するような装置にしたんです。《洗庭》の制作時期にかぶっていたので、相互に影響がありましたね」と名和氏。五十嵐氏は「真っ暗闇から頭部の見えないダンサーの身体が現れるシーンは、人間とは別の生命体が生まれ出て、進化したみたいだった。《Foam》の続編ともとらえられる、一連のつながりを感じられた」と話す。

名和氏の作品シリーズでは、「水」や「光」、そして複数の素材を合わせた「液体」といった、制御しにくい不安定な要素がさまざまな事象を生み、それが鑑賞者の意識を飲み込みながら、アートの体験へとつながる。「彫刻を単にオブジェとして完結させるのではなく、彫刻自体を体験ととらえ、空間をつくっていかないと満足いかない」と言っていた名和氏が、体験の環境をも作品化したのが《洗庭》である。そういった意味で、作家がこれまで思考してきた作品概念の集大成とも言えるのではないだろうか。

今回の対談は、《洗庭》プロジェクトの成り立ちを紐解き、名和氏のこれまでの活動から、作品を文脈づける貴重な機会となった。ちなみに、作品が公開された後も、音響を入れ、映像のメンテナンスを行うなど、継続したアップデートがなされている。《洗庭》は、訪れる度に異なる体験をもたらしてくれるだろう。



《洗庭》を知るための 3つのキーワード

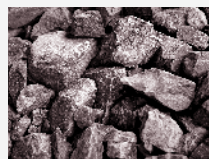
1 作品と建築が一体化したアートパビリオン

当初は禅画ギャラリーを含むミュージアムを設計予定だったが、名和氏が屋根裏の空間と暗がりを生かした瞑想体験のできるインスタレーションを提案。最終的に、体験型作品とその環境＝建築も含めたアートパビリオンとなった。



2 コンセプトは「意識の海」と「物質の海」

亡くなった人を弔うため、地元の造船所によって建立された神勝寺。山あいに浮かぶ船のような建築や海をモチーフとしたインスタレーションは、その背景から着想を得ている。舟(=建物)の中に瞑想を体験するための「意識の海」(=作品)が広がっている、という入れ子構造をもち、また建物の下に敷き詰められた荒々しいさび石は「物質の海」として、建物内部の「海」と対をなしている。



3 他分野のクリエイターとの協働

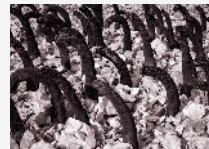
柿葺き(屋根:宮川義史氏・宮川屋根工業)

神勝寺に馴染む建築に仕上げるため、社寺建築で伝統的に用いられてきた柿葺きの屋根を採用。サワラ材という小さな木のパーツを連続して貼り付け曲面をつくっていく。1,000年以上の歴史と実績をもつ伝統的な工法のため、屋根の角度や雨仕舞の方法などが細かく定められており、その中で前衛的な屋根の角度と寺院に馴染む屋根の印象がせめぎ合うバランスを1年以上かけて模索した。



植栽(ランドスケープ監修:西島清順氏・そら植物園)

隣接する日本庭園との関係や導線に配慮しつつ、台湾やマレーシアに分布する無骨な古代樹「ソテツワラビ」を石のランドスケープの一角に群体として植樹。また、春と秋に花を咲かせる「四季桜」を紅葉樹と混ぜて植えるなど、すでにある環境へ働きかけるような庭園設計を行った。



インスタレーション(インスタレーション:名和晃平氏 | WOW・田崎佑樹氏 / 中路琢磨氏、音響:原摩利彦氏)

夕日が海にキラキラと反射する、その部分のみを抜き出すという名和氏のアイデアのもと、界面における光のふるまいを記述する「フレネルの式」を参考に光源＝映像からの光の入射角を設定。映像機器自体は見えないが、自然現象のように水面でゆらめく光をWOWとともに調整・プログラミングした。また、ミュージアム内で採集した足音や鐘の音を用いて、瞑想を促すサウンドスケープを原氏が制作。

